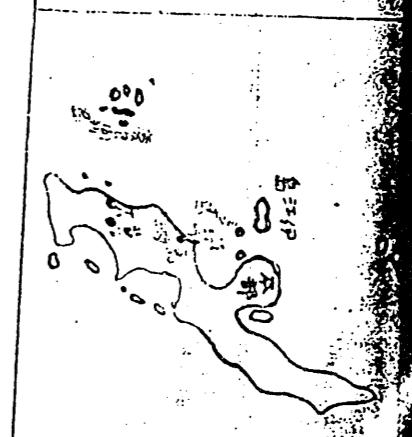
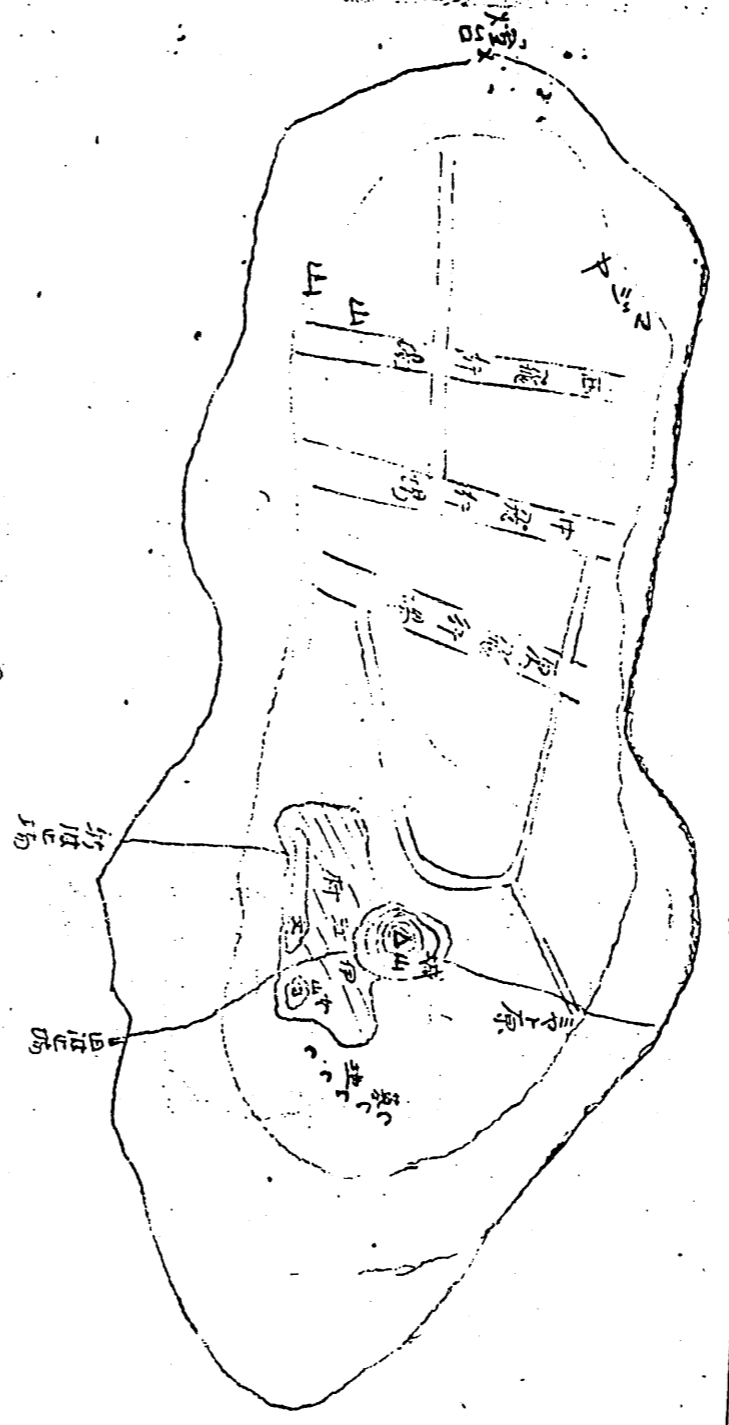
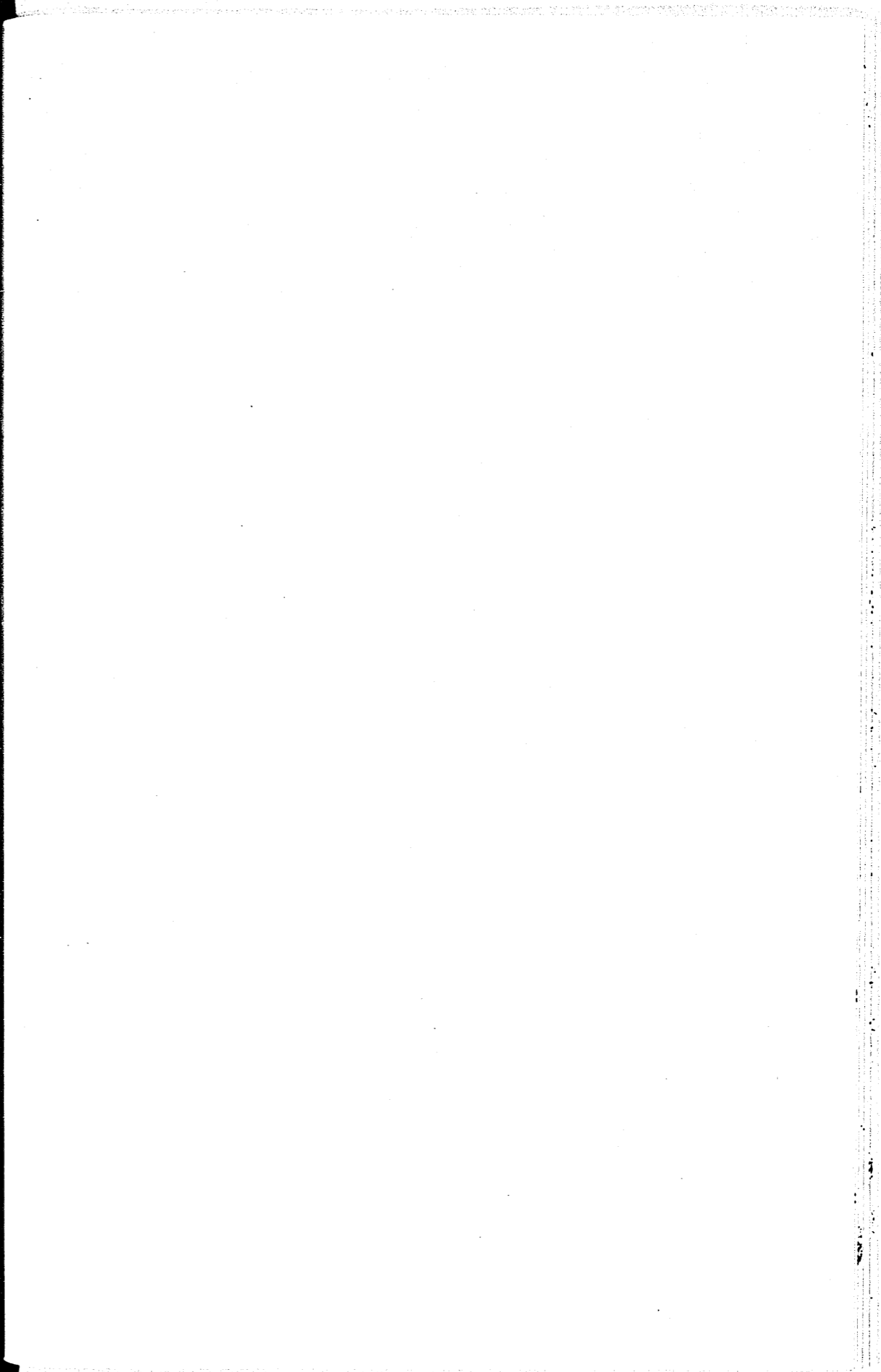


書
物
7

45



44



20.4.21	戦死	2号1大	宇治市岳洲4161	元政喜	伍長	西尾 定
20.4.21	"	" 1大	" 松崎 1-96	二子 工	兵長	山田 政男
20.4.21	"	1大隊長	" 麻生 2899	" 善子	大佐	井川 正
20.5.24	"	朝鮮 30	" 下高家 1105	高富雄	中尉	田畑 一
20.4.21	"	2号1大	大田村指掛 3583	高 7 廿 二	伍長	田邊 季雄
20.4.21	"	50飛大	香地町見目 416	女八治	兵長	木下 利夫
20.4.21	"	2号1大	" 見目 2459	高 千 里	伍長	元兼 止次郎
20.4.21	"	44砲隊部	国見町 伊集 2696	" 房子	曹長	浮松 貞行
20.6.21	"	"	国津町 湊 1364	" 房子	曹長	岡野 満
20.6.21	"	32新備物	" 岩井寺 753	女三九馬	伍長	山本 忠士
20.4.20	"	2号1大	安坂町 塩屋 1500-2	高 7 1	伍長	柏 克摩
20.4.21	"	"	日出町内新 533	" 文子	曹長	竹友 廣次
20.4.20	"	"	扶間町 赤野 296	" 又子	軍曹	田口 陸丸
20.4.20	"	"	庄内町 相田 188	女 忠雄	兵長	二宮 六郎
20.4.27	"	"	津和野町 川西 1999	高 十 二	伍長	日野 直
20.4.20	"	"	宇日町 南田原 2095	" 力子	曹長	矢野 馨
20.4.21	"	"	駒津町 都原 9733	" 下子	伍長	梶玉 春美
20.4.21	"	"	" 前川内 2590	" 二子 工	曹長	竹尾 徳
20.4.21	"	"	清川村 平石 1525	" 二子 子	伍長	大神 年直
20.4.21	"	"	緒方町 馬場 2007	" 昌子	伍長	首藤 将寿
20.4.20	"	"	南地町 利小 17	" 江 七	兵長	渡邊 登
20.4.21	"	"	九倉町 石田 3688	" 八代	伍長	小野 楠次
20.4.21	"	"	" 田部 1058	" 井 7 子	伍長	甲斐 藤一 郎
20.4.18	"	50飛大隊	玖波町 大田 211	高 忠彦	伍長	再井 道雄

20.4.21	戦死	2号1大	中津川村 柳井 631-1	女 三 男	兵長	津川 富男
20.4.21	"	"	大山町 西大山 8631	高 三	伍長	松原 作栄
20.4.20	"	"	大瀬町 五野 8083	女 仁 市	兵長	川津 寿夫
20.4.21	"	"	院内町 法橋 2623	高 重 夫	兵長	石川 正一

沖繩伊江島戦死者名簿 大分県出身者

年月日	戦致	部隊名	遺族住所	随隊名	階級	氏名
20.4.19	戦死	2歩1大	大分市勢家1057	文一	兵長	大津順一
20.4.21	"	"	" 生石 331	文子	伍長	吉松幾太郎
20.4.20	"	"	" 豊鏡 164	文平	"	安部伍郎
20.4.20	"	"	" 勢家1292(母死)	文七	"	麻生光
20.4.21	"	"	" 萩原 192	文四	軍曹	園田喜六
20.4.21	"	"	" 原	文八	兵長	佐藤卓美
20.4.21	"	"	" 横尾 2316	文三	伍長	岩本清市
20.4.21	"	" 1大	" 鶴崎 523	文五	准尉	石黒節男
20.6.20	"	" 1大	" 木田 3787	文雄	伍長	吉村 巧
20.4.18	"	"	" 上志村 32	文喜	兵長	水田豊喜
20.4.21	"	"	" 末吉 1110	文秀	伍長	長岡悦夫
20.4.20	"	"	" 野田 1111	文七	大尉	草牧 颯
20.4.21	"	"	別府市渡脇 522	文一	兵長	石井源造
20.4.20	"	"	" 野口 505	文作	伍長	加藤一室
20.4.20	"	"	白田市野田 130	文枝	曹長	蒲田 司
20.4.21	"	"	" 朝野 729	文子	大尉	蒲池準太郎
20.4.20	"	"	" 高松 552	文キ	伍長	野村義夫
20.4.20	"	"	" 川山 1035	文キ	曹長	梶原善一
20.4.21	"	"	" 屋尾 250	文子	伍長	稲葉一郎
20.4.20	"	"	臼杵市風成 617	文キ	兵長	平川 勇夫
20.4.21	"	"	" 海部 220	文	"	木村次夫
20.4.18	"	独立整備	杵築市下町 2359	文次郎	伍長	中野孝一
20.4.21	"	2歩1大	宇佐市上女 232	文サト	兵長	加来信胤

コクヨ ケー15

伊江島攻略戦 ④

4月21日に占領宣言

戦死者日本軍4千、米軍2百

第三〇七連の作戦区域では全面に地雷や爆弾が埋められているという状態であった。そのため戦車も自動機銃も歩兵隊を擁護できる適当な距離まで接近するのにかかるの苦労があった。連隊は「血ぬられた丘」からの日本軍の激しい砲火で進軍を阻まれ、その日はわずかに前進できず、海岸から四百ほど内に侵入し、前線に夜にそなえた。

アニー・パイル死す

第七師団は火力を総合的にうまく利用するという効果的な方法を使ったので伊江島にある程度の面積を確保することができた。地上戦の命令は第七師団副師団長のランドル准将にあたえられた。

四月十八日、ランドル准将は命令を伝へて第三〇六連隊は大きく展開して伊江島北の全地域を確保し、第三〇七連は南側から、ガバメント・ハウスと血ぬられた丘、および山の方へ攻撃を続けるよう指示した。その日、戦闘は激しかった。にもかかわらず、日が終わるまでには歩兵は各大隊ともこの激しい砲火を陣地を奪取し、戦闘配置についた。

四月十九日も米軍攻撃の主力は島の南におかれた。第三〇七連は第三〇五連の応援を得て伊江島南を確保し、ガバメント・ハウスや血ぬられた丘への接近を試みたが、連隊は進軍としてはかどらず、日本軍は米軍に歩も踏ませないという状況に陥った。この日の連隊のクライマックスであった。

銃剣での白兵戦も

四月二十日、第七師団は山の中をまっしぐらに山めがけて突進、斜面部分を占領、壕のひもとつとつ、またタコ登のひもとつとつを大炎放射銃や手投げ弾でつぶして行った。正午、連隊は頂上から二百のところに到達したので、そこで隊の再編をした。もう一度砲兵隊や支援大隊による予備砲撃。第三〇六連は険しい山腹をこぎ上り、意気高く進軍した。山岳訓練を受けた歩兵は連隊内に呼び、頂上から投げられる手投げ弾や爆薬の雨をもとせず、第一大隊は頂上の手前一步というところを押えた。この日の連隊のクライマックスであった。

撃ち倒された星条旗

四月二十一日、第七十七師団が伊江島に上陸してから六日目、島の確保が重責された。副師団長のランドル少将は全軍訓練をとりながら最後の掃討戦を指示した。間隔がせまられていたからで友軍を襲つた危険性があつたからである。第三〇六連の山岳部隊が伊江島ツツユウ(頂上)に午前十一時五分、旗を立てた。だがその旗はにぎらされてしまった。伊江島の組織的抵抗の最後の足場が消滅されたのは、午後五時、五分になつてからであった。次の四日間、第七師団は生き残りの日本軍や民間人までを掃討して行った。日本軍のこれまでの損害は四月二十一日までに戦死四千七百六十八人、捕虜百四十九人であつた。その後の掃討戦でさらに戦死百八十八人、捕虜三十人かふえた。井川少佐の守備隊は第七師団の勝利にも高い代償を払わせた。戦死二百三十九人、負傷八百七十九人、行方不明十九人であつた。

伊江島攻略戦 ①

77師団が上陸部隊

大砲も人影もない、幽霊島

四月一日の沖縄上陸後、第六海兵師団の北部連隊は急遽に運搬されたので、当初の第一、二段階作戦について再検討する必要がある。

石川以北は陸上作戦で確保できることが明らかになったため、海軍としてはこの地区には補給と交通による支援作戦だけに留めておきたいという意向になった。

これまでの計画では本部半島上陸のときに使うことになっていた艦隊が、ひょっとしたら伊江島に差し向けることができるかもしれないという可能性が出てきた。

第五二機動部隊連隊長司令の「アール」中将は直ちに命令を出し、伊江島と飛行場を確保しようとした。四月十日、第一機動部隊北部方面攻撃軍の「フスマイ」少将が伊江島攻撃隊司令官に任命された。

七歩兵師団であった。師団長フル・マシは三月二十六日、米軍長官に報告して、伊江島に上陸する計画が、三月二十六日、米軍長官の承認を得て、四月一日に上陸作戦が開始された。

四月十日、第一機動部隊北部方面攻撃軍の「フスマイ」少将が伊江島攻撃隊司令官に任命された。

四月十一日、第一機動部隊北部方面攻撃軍の「フスマイ」少将は、伊江島攻撃隊司令官に任命された。

四月十二日、第一機動部隊北部方面攻撃軍の「フスマイ」少将は、伊江島攻撃隊司令官に任命された。

この攻撃で第七七師団がこうむった損害は戦死二十二、負傷七十六、行方不明十人であった。ヘンリコ号は火災を起こして大被害を受けた。修理のため慶良間列島に引航され、ここで三〇五連隊の本部は輸送艦サラランタに移されたのである。

新しく連隊長も任命され、将校たちは第七七師団から配転されて組織の再編が行われた。

戦闘機用に
欲しい滑走路

三〇五歩兵はその悲劇的な損害にもかかわらず、ブルース少将の指揮の下に他の部隊同様、次の戦闘任務に備えようとしていた。彼らの攻撃目標である伊江島は形からすれば大規模な高原状の島で、縦横それぞれ五、二、一五キロの面積、本部半島の北西二、五キロの海上に突出したような島であった。

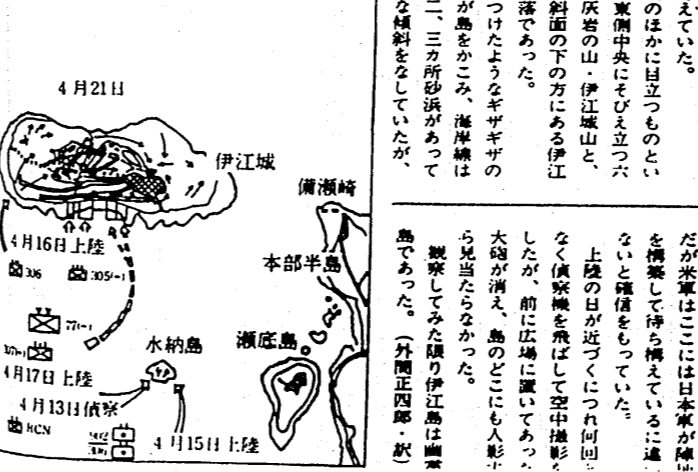
島の大部分は平坦で、それが低い丘やところどころにある灌木の茂みに邪魔されているようなもので、それだけに日本軍でも米軍でも飛行場をつくりたい欲望にかられるような地形だった。

島には中央の高くなっているところ、日本軍が三キロの長さの滑走路をつくらせて、太平洋地区米軍の参謀たちとしてはこの現存滑走路を拡張し、さらに増やしてゆくには超距離爆撃機運用の全戦闘機が整備できるようにしたいと考えていた。

飛行場のほかに目立つものといえば島の東側中央にそびえ立つ六百メートルの石灰岩の山、伊江城山と、その南側斜面の下の方にある伊江島の各部隊であった。

フサをつけたようなギザギザのサンゴ礁が島をかこみ、海岸線は南と東で二、三カ所所狭がらあつてゆるやかな傾斜をなしていたが、

伊江島攻略図 1945年4月16日～21日



北海岸と西海岸はそれとは対照的に切り立った絶壁で上陸を阻んでいた。

一九四五年の一月に伊江島を空から偵察したときは日本軍の力は歩兵二個大隊と飛行場建設が島の防衛に当たっていると推察されていた。敵反撃の拠点は南の砂浜と西海岸の間、および飛場と部隊があるのが認められた。伊江城山をかなり近距離から撃つことが防衛をほどいているから、うかがい分けることはできなかったが、米軍はここには日本軍が陣地を構築して待ち構えているに違いないと確信をもっていた。

上陸の日が近づくと、何回も偵察機を飛ばして空中撮影したが、前に広場に置いてあった大砲が消え、島のどこにも人影が見当たらなかった。

偵察してみた限り伊江島は幽霊島であった。(外間正四郎 訳)

伊江島攻略戦 ②

勇敢に戦った地元民

まれな指導者・井川少佐

超低空でも
人影見えず

上陸直前になって飛行場滑走路に進入すると、地雷などが現れ始めた。だが、いざ入隊兵の姿は見えない。

三月二十七日から四月十五日にかけて島の木を、へんりくせいに観測機を超低空飛行させてみたが、それでも見かけた人影は五人だけだった。

第十陸軍のなかにはほとんど敵は掃蕩したのだと確信をもっているものもいた。

だがブルース海兵隊少将や参謀たちはこれを疑問に思っていた。そして実際に「第七十七師団は日中偵察を行うため、二個中隊を島に上陸させるべし」という陸軍の提

案に反対し、説得に成功したのである。師団の偵察隊は、島に上陸するに当たって、地雷が埋まっているのを見つけた。日本軍が大量の地雷を埋めていたのは、島に上陸するに当たって、地雷が埋まっているのを見つけた。

名目上は伊江島の守備隊は本部半島守備隊の第四大隊の一部で、井川少佐の指揮下に属していた。だが実際には島の先任将校である井川少佐が防衛の指揮をとっていた。

第二歩兵隊の第一大隊長である井川少佐は特別に秀でた指揮者であったといえる。アイスマーブ作戦（沖縄攻略作戦）を通じて沖縄のどこでも地元民が伊江島で、たはど勇敢に戦い、また成功を収めたところはなかった。

第七十七師団は「ほとんどの場合、民間人と軍人との戦いには差

がなかった」と報告した。千五百人以上の男と女が自らの島を守るために死を賭（と）して正規の守備隊に参加した。

井川少佐の部隊の中核となつてゐるのは少佐自身の部下である九百二十人からなる大隊で、第五〇特設歩兵大隊、第五〇飛行隊からなる三百五十人で増援されていた。およそ二千人の守備隊の周りに飛行機の整備隊や設営隊、および沖繩現地徴用の特設工兵部隊がいた。手づくりの橋から七五、野砲にいたるまで利用できるあらゆる武器がアメリカの上陸艇すまじと待ちかまえていた。

伊江島攻略作戦の第一陣を承ったのは艦隊海上陸偵察大隊であった。主目標である伊江島の南東六十五キロ沖合に横たわった小さな水納（みなな）島を占領するよう命令を受けた。第七十七師団偵察隊の一〇五、二〇五、二五五、曲射砲一門を伊江島奪取のさい水納島に据えることになった。

四月十三日午前四時四十五分、偵察隊は目的地に上陸、二時間足らずでさつと島を一巡した。敵兵は見えず、わずかに戦争におびえた民間人が三十人くらい見つかつただけであった。

四月十三日と十四日、大隊は水納島の一角を占領、場所を設定、海軍の艦隊艦隊がリーフや海岸を整備して砲兵隊の上陸準備をすることができるよう掩護（えんご）

伊江島の南西海岸は東側に比べれば条件はまだ悪かったが、ブルース少将は最初の上陸をここに試みることに決定した。

師団の参謀たちは伊江島の西部の防衛は薄いと確信をもっていた。彼らとしてはここを通過して速やかに進軍を再開、南東部にある戦場や飛行場建設に必要な重機類の陸揚げに必要な場所を確保する計算であった。

(外間正四郎 訳)

体制をとった。

偵察隊指揮官ジョーンズ少佐は四月十四日正午前に再び部下を乗給させ、翌朝三〇五連隊と三〇六隊そして九〇二の各野戦砲大隊が新しく開けられた水路を利用して上陸、砲撃準備をととのえた。

伊江島の海岸やリーフもまた四月十三日と十四日海軍艦隊隊によって調査された。地雷や障害物はみつからなかった。だが爆撃隊員が島の南西海岸を調べているとき発見の小銃弾が飛んできただけであった。伊江島を偵察したときは彼らを出迎えたのは「静寂」だけだった。

井川少佐としては明らかに米軍をして伊江城山の陰にある海岸は無防備だと思込ませたかったのだから、だがそれがならいだとしたら、彼は間違っていたのである。

伊江島の南西海岸は東側に比べれば条件はまだ悪かったが、ブルース少将は最初の上陸をここに試みることに決定した。

師団の参謀たちは伊江島の西部の防衛は薄いと確信をもっていた。彼らとしてはここを通過して速やかに進軍を再開、南東部にある戦場や飛行場建設に必要な重機類の陸揚げに必要な場所を確保する計算であった。

(外間正四郎 訳)

伊江島攻略戦 ③

36隻で集中砲撃

機動部隊、4月16日に上陸

には左翼にいた第三大隊は敵の
開銃や白砲の激しい銃砲火の中、
伊江島はすれすれまで前進するこ
ができた。また第一大隊も上陸部
点の後方地域の一部を掃討してし
た。

血ぬられた丘

第三〇七連隊の第一、第二大隊
では四月十七日早朝浦具知沖合の
LST船に乗り移り、残った第
大隊は十九日の機動上陸作戦を展
開するため輸送船上にとどまり、
午前十時三十分、これら大隊は
伊江島沖合に到着、それぞれの目
標上陸地点へ水陸両用戦車による
上陸準備をととのえていた。この
海岸はどちらもまだ完全に確保
されておらず、日本軍は伊江島山
から下方、三〇七連隊が上陸した地
点にむけて機関銃や白砲弾を浴び
せてきた。

晩までには第三〇六連の部隊は
上陸地点からほとんど五千五百
も前進、伊江島山から六百しか
離れていない伊江島の真北まで
来ていた。

一方第三〇五歩兵のほうでは南
海岸を攻撃しようとしたとたん日
本軍の激しい反撃にあつた。敵は
壕から、米軍に一尺の地も許すま
じと撃ちまくってきた。

その晩三〇五連は繰り返し見え
し夜襲と侵入を受けたが、さいわ
いにして全部これを撃退すること
ができた。

翌朝、同連隊前線の周りには百
九十九の敵死体が数えられた。

四月十七日第三〇五連隊では水
納島と伊江島の百五、砲大隊が予
備砲撃を加えたのち海岸後方の高
台を襲撃、午後零時四十五分まで

いで埋められたもので爆撃機の日
を避けるためカムフラージュされ
ていたのである。このため米軍軍
備は歩兵部隊を補給支援しようと
もその行動ははなはだしくせまら
れてしまった。

一尺の地を求めて

午前十時四十分、第三〇六歩兵
は約二千が前進、その第一段階前
線に到着した。同連隊の予備大隊
である第三大隊も上陸、連撃部隊
後方から掃討作戦を展開した。

伊江島山からは射撃距離の長い
対戦車砲や白砲による砲撃があつ
たが攻撃大隊はその日の午後、日
本軍にねらわれることもなく確定
した。

による大威砲撃が一斉に開始され
た。島は機動部隊の艦船一隻、駆
逐艦七隻、白砲艦七隻、砲艦十
隻の集中砲火を浴びた。各艦に属
形戦区が指示され、伊江島山周辺
は特別に注目された。

水陸両用トラクター群が波浪の
ように目標に向かって出撃しよう
とするその五分前、十六機からな
る戦闘機がまず海岸に機銃掃射や
ナバーン弾による攻撃をかけ、別
の戦闘機や機銃掃射機は島の上空を旋
回して攻撃軍の援護と上陸部隊の
支援態勢をとつた。

午前八時、装甲上陸部隊の第一
波全部が海岸に着いた。間もなく
攻撃部隊がこれに続いた。兵は
すばやく前進したが、連隊のどの
地区でも反撃はほとんどない。

ところが西側では全面に地雷
が敷かれ、ほとんどは地雷
掃討隊であった。

この伊江島攻め作戦の全期間を
通じて敵機はわがレーダー網や警
戒機の監視網をくぐり抜けようと
試みたがほとんど失敗、成功した
機も五、六機にすぎない。空襲は
例のごとく、艦隊のビクライン
がカメラで捉えた代価も大きか
らなかつた。

西側は全面地雷敷

敵機による空襲があつたにもか
かわらず第五、機動部隊は四月十
六日の夜明けには予定通り伊江島
の砲撃を開始した。

午前七時、十五分、上陸開始の
信号とともに、まず直接掃討部隊

4月21日、日本軍の「玉砕」、そして全滅によって、伊江島の戦闘は終わった。
この戦闘での死者は「伊江島戦史抄」によれば4500人であり、そのうち、伊江島の住民は1500
であったと推定されている。戦争の犠牲者を出さない家は伊江島にはないといわれている。
九死に一生を得た人々は、アメリカ軍によって、洞窟から、西南海岸のナラに設営された
民キャンプに収容された。そして、5月上旬、アメリカ軍の舟艇で、慶良間へ運ばれた。渡嘉
1500名、慶留間500名であった。

当時、渡嘉敷では、赤松隊が山中にたてこもっており、住民もまだ山中にひそんだままであった。
慶良間における最大の難事は極端な食糧不足であった。ソテツ、芋の葉、つわぶき、雑草な
食べられるものは何でも食べた。ソテツを取りに部落を出て、地雷がわりにセットされたアメ
リカ軍の手投弾にふれて死ぬ者も出たし、ソテツの中毒もひんぱんにあった。
また、アメリカ軍の命令で、山中の赤松隊に投降勧告に使用した5人の伊江島出身者が、赤松
斬殺されるという事件も生じた。
慶良間での1年の生活のあと、久志、本部町などを転々と移動して、1947年(昭和22年)、
伊江島に帰ることを許された。

四

伊江島の戦闘に先立ち、本部半島へ疎開した人々の苦しみも、また、同じであった。
今帰仁村兼次のクスノキ山に、集団で避難していた伊江島の疎開者は、ここで砲撃を受け、
ほとんどが小屋を焼かれ、或る者は死傷した。本部町のマンナへ、集団で米をとりに行って、
アメリカ軍の艦砲射撃にあい、2~30人が死んだこともあった。

その後、まもなくアメリカ軍につかまり、1時、今帰仁村今泊に滞在ののち、久志村の大浦
から辺野古へと移動させられた。その間の最大の苦しみは、食糧の不足であった。とくに、大浦
崎では、水もない台地のカンカン照りの中のテント小屋にあふれんばかりの人間がひしめきあ
つた。

食を求めて、収容キャンプ外へ出ると、食糧は没収の上処罰され、なかには、射殺される者も
あった。そのような危険を犯してまで、遠く名護あたりまで、芋を掘りに出かけた。その途中、
日本軍の敗残兵に食糧を奪われることもしばしばであった。それでも、そのような働き手のある家
族はまだいい方であった。多くの人が飢えた。栄養失調で腹部がふくれ上り、頭と目玉だけが大き
くて、そのほかは棒きれのようにやせ細った子どもたちがいっぱいだった。そこへマラリアが
流行した。毎日毎日、新しい墓標がふえ、空地は墓標の林となった。棺もなく、死者は麻袋にく
るんで埋葬した。

五

アメリカ軍によって、慶良間へ運ばれた人々も、本部半島へ疎開して久志村へ移動させられ
た人たちも、終戦後、ただちに伊江島に帰れたのではない。

伊江島を占領したアメリカ軍は、島の人々を慶良間に移してのち、2年近く排他独占的に伊江
島をその軍事目的に利用し、そのため、伊江島住民は、終戦2年を経た1947年にして、ようやく
父祖の地に帰ることを許されたのである。(儀部景俊)

1943年(昭18)7月、飛行場建設の任を負う田村飛行場大隊が、伊江島に移駐した。建設は、国場組の請負と軍直営とによって行われた。近代的な土木機械は皆無の状態であったの工事のほとんどは、ツルハシ、ショベル、スコップを使用して人力に頼らねばならなかった。そのために、島の内外から、多くの労務者が「徴用」され、他方、中学校・青年団・学童に「勤労奉仕」が強制された。また島の農家から、荷馬車が「徴用」された。『伊江島戦史(1957年4月21日、伊江村)』によれば、「徴用人夫」1日平均2,500人、荷馬車300台が動員されたといわれ、島の住民の証言によればその日当賃金は、労務者1人80銭、馬車1台5円であるといわれる。無報酬の「勤労奉仕」もひんばんに行われ、例えば小学校(当時「国民学校」)の上級学年生は、1週間のうち3日は授業、3日は「勤労奉仕」による飛行場建設に就いた。

このように、島の住民の可働者全員が、飛行場建設にかりだされたのであり、このようなことは、1944年(昭19)1月の西村大隊の移駐後、地下壕を中心とする陣地構築の工事が加わることもない、更に拍車をかけられた。

労働は、未明から日没まで長時間にわたって課せられ、人間はもちろん、馬も疲労に喘ぐほど苛酷であった。

この労働のあいまを縫って、竹槍訓練や防空演習もひんばんに行われた。

のちに、「東洋一を誇る」といわれるようになった広大な飛行場建設のために、住民の私有地が強制的に収用された。それは、原野・畑を含み、強制買収の形をとったが、これにたいする償いはほとんどなされていない。土地の代金の支払いは、全額でなく部分的になされ、それすら領していない地主が多いといわれる。

このほか、陣地に転用するために墓をあげわたしたり、工事に使うために石垣の塀をこわしたりした。

前に述べた西村大隊に替って井川大隊の移駐、防衛隊一個大隊の配備、飛行場工事増援のための佐藤大隊の一時的来駐など、最大時には推定二千数百人の将兵が伊江島に駐屯したが、その容のために、伊江村民は公共施設や民家を提供させられた。村役場は、守備隊の本部に、学校食糧置場や兵舎に転用され民家にも兵隊が分宿した。

1944年(昭19)10月10日、沖縄全域を襲ったアメリカ軍艦載機は、伊江島にも空爆をおこなった。爆撃は建設中の飛行場に集中して向けられたので、民間区域の犠牲は少なかったが、島唯一の連絡船と40数人の人命を奪った。空襲が去ると、島の住民はふたたび、飛行場の修復にかり出された。

二

明けて、1945年(昭20)1月22日、伊江島をおそった第2回の空襲は、飛行場などの軍事施設ばかりでなく、民間地域にも多大な損害をもたらした。文字通り着のみ着のまま焼き出された者や死傷者が少なかった。そして、空襲後は自失する間もなく住民は飛行場修復にかり出されたことはいうまでもない。

こうして、3月上旬、1年半以上の歳月をかけて島の住民の血と汗とによって建設された陸上飛行場が完成した。それは、全長1,500メートルの滑走路3本をもつ、当時としては「東洋一を誇る」(八原博道『沖縄決戦』202ページ 1972年)規模のものであった。

ところが、こうして建設したばかりの飛行場を、3月10日、駐屯軍は突然、破壊しはじめた。それは、アメリカ軍の上陸を必至とみた第32軍(沖縄駐留軍)と大本營の判断と命令によるものであったが、それが、村民の証言によれば、完成の翌日のことであつたとも、また、たった1回本軍機が着陸しただけともいわれ、あまり唐突さに村民は啞然とせざるを得なかった。

しかし、村民はまもなくこのことからアメリカ軍上陸のさけられないことを察知し、先を争って島外への避難をはかった。すでに、1944年(昭19)の夏以後、県外や沖縄本島(主として本部島)への疎開がすすめられてきたが、1945年(昭20)3月段階でも大部分の住民が島に残っていた。それが、波止場に殺到しても、軍の小型舟艇では処理できず、港はパニック状態を呈したり舟で脱出できたのはまだ幸運で、多くの者が島に残った。また、この時期には、駐屯軍が波止場に監視員を配置して、14、5歳以上の青年男女を含む可働者の島外への脱出を禁止したので監視員の眼を盗んでくり舟で脱出をはかった者のほかは脱出は文字通り、老人と子どもづれの婦に限られた。

3月23日、3度目の空襲により、島の民家はことごとく焼失したが、さらに3月28日以後島は日の空爆下にさらされ、まもなく、これに艦砲射撃が加わり、住民は洞窟や防空壕にこもりきりにさせられた。

4月前半に、本部半島を制圧したアメリカ軍は、空爆と艦砲射撃にまもられながら、ついに島の南岸に上陸した。伊江島の地上での戦闘は、4月21日、日本守備隊が全滅するまで6日間続いた。この間、伊江島の住民は、ある者は洞窟にひそんで死の恐怖におののき、ある者は戦野をさまよひ、そのうちある者は、銃砲弾のえじきとなり、ある者は集団で自決した。部落内で、銃砲撃によって殺された者、自決した者もあったが、伊江島北部の洞窟に安全地帯を求めて移動の途中死んだ者、また、北部の洞窟に潜伏中、アメリカ軍の掃蕩戦で殺された者も少なくない。

これら一般住民とは別に、軍と行動をとるに、軍に協力させられ、辛酸をなめ、死傷した者も多い。

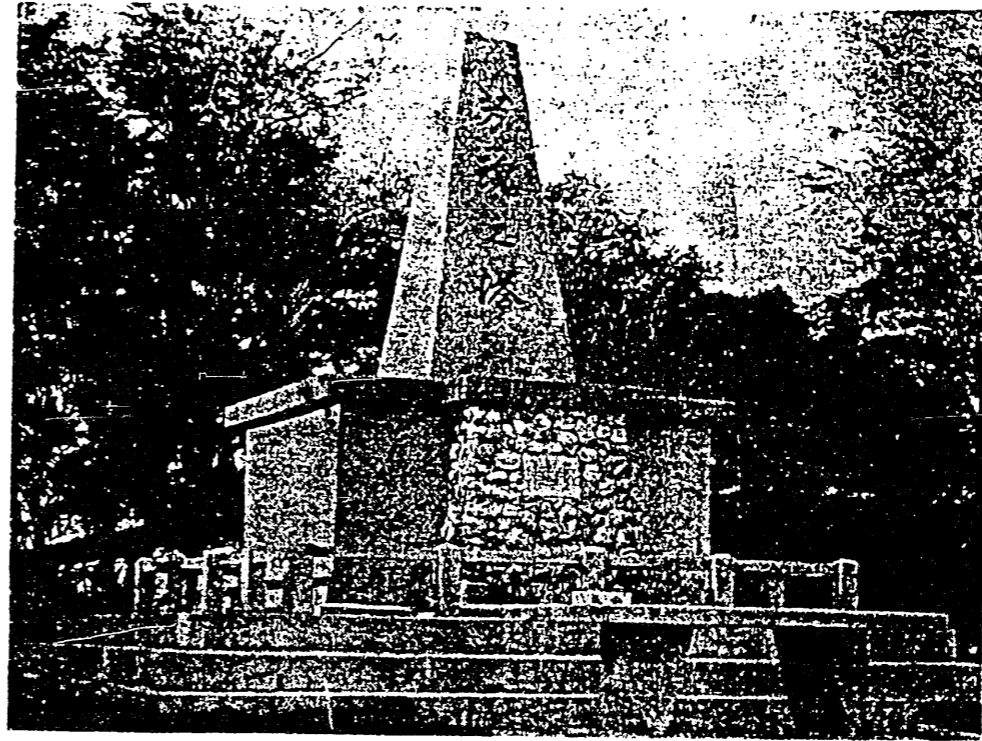
<看護班> 島の女子青年で編成された従軍看護婦の集団である。軍の命令で召集され、ほろつき程度の簡単な教育を受けた程度で守備隊の各分隊に配置された。地上の戦闘が始まるまでは、陣地の壕掘りや炊事に従事し、戦闘中は負傷兵の看護にあたり、4月21日の守備隊の「総攻撃」=総攻撃には将兵とともにアメリカ軍戦車に体当たりをすべく爆雷を背負って参加して多くの戦死者を出した。

このほかに炊事班、大隊本部勤務の女子職員も居たが、これも看護班員と同じ運命を辿った。

<青年義勇隊> 青年学校在学中の満14歳以上17歳未満の男子青年を以て組成された。志願の者をとったが、実質的には軍の命令によるものであり、青年学校教師G氏は積極的にこれを選んだ。各字ごとに編成され、最寄りの分隊に配属された。地上戦闘の始まるまでは壕掘りに従事したが、地上戦では、攻撃時の道案内や、爆雷を背負ってのいわゆる「肉迫攻撃」を受けもった。多くの犠牲者を出した。

<防衛隊> 1944年(昭和19)10月以後、満17歳以上46歳未満の男子で、正規の兵役にある者から男子を召集して防衛隊が、組成されたが、伊江島にも飛行場建設のため、主として国頭郡民衆で構成される一個大隊が配置された。伊江島の出身者もほとんどがこの大隊に配置された。全隊で軽機関銃2挺、数人に小銃1挺という貧弱な装備の隊であった。アメリカ軍の上陸時、島の西北部洞窟に居たが、その貧弱な火力で戦闘し、全滅する小隊も出るなど多くの死者を出した。4月18日には、隊は解散になり、生存者は島を脱出して本部半島の宇土部隊に合流したが、または城山の守備隊に合流せよとの命令を受けた。脱出組は、いかだを組んで海峡に乗り出したが、潮流にのまれる者、アメリカ軍の銃撃に倒れる者多く、本部半島に辿りついたのはごくわずかであった。他方、アメリカ軍の包囲網をくぐって城山陣地への合流をはかった者もそのうちが戦死した。

伊江島戦史抄



ひねもすを

とどろとどろと

潮騒の

声をまくらに

ここだくも

眠れる霊の

夢まどかならむ

(注)

芳魂之塔に刻んだ歌で故名喜元浪村作
書は故伊是名正信である

